

日本学術振興会研究拠点形成事業（A. 先端拠点形成型）
中間評価（29（2017）年度採択課題）書面評価結果

日本側拠点機関名 名古屋大学（客員教授・阿部 泰郎）

研究交流課題名 テクスト学による宗教文化遺産の普遍的価値創成学術共同体の構築

評価結果（総合的評価）

- | | |
|----------------------------------|--|
| <input type="radio"/> | A 想定以上の成果をあげつつあり、当初の目標の達成が大いに期待できる。 |
| <input checked="" type="radio"/> | B 想定どおりの成果をあげつつあり、現行の努力を継続することによって目標の達成が概ね期待できる。 |
| <input type="radio"/> | C ある程度の成果をあげつつあるが、目標達成のためには一層の努力が必要である。 |
| <input type="radio"/> | D 成果が十分にあるとは言えず、目標の達成が期待できないため、経費の減額または中止が適当であると判断される。 |

所見

国際的な研究交流活動を推進するだけでなく、これまでの人文学の成果を活かしながら、宗教が形成・伝承した宗教文化遺産を主な対象とし、それらを新しい視点で読み直す試みを着実に進展させるとともに、人文学が積み上げてきたテキスト学の方法と理論とを媒とした各種分野を横断する分野融合的先端研究にも取り組んでいる。日本側拠点と相手国拠点との個別的な共同研究交流は、2年間で延べ14回のセミナーを開催するなど非常に活発に行われているだけでなく、相手国拠点機関との共同研究にも進展している。これらの成果の多くは、編著書・論文や学会等における口頭発表で公表され、また展覧会等で社会的にも還元されていることは高く評価できる。

若手研究者の育成の面では、セミナーでの討論を通じた育成や次世代の中核を担う研究者のネットワーク作りに注力されており、高く評価できる。

今後の研究交流活動について、経費支給期間終了後に研究拠点としてその機能を維持していくためには、新たな経費の確保が必要であるが、その点についてもすでに努力を始めている。計画が順調に進行すれば、人文学全体に研究効果が波及していくことが十分に期待できるプロジェクトである。他方、相手国拠点との交流について日本側中心の活動となっているようにみられる。各相手国拠点と個別的に共同研究を行う段階から全拠点および協力機関の結集する全体的なコンソーシアムをいかに構築して行くかが課題であろう。各研究交流と共同研究の有効な連携についてより明確にさせていただくことを期待する。